西条東中学校区
N
酒井家洋館 5
船屋新開埋立記念碑 3
2 碇神社
吉祥庵 12
朝潮太郎生誕の地 13
（石碑は西条南
中学校区参照）
玉津小学校
文
玉津公民館
お舟森 1
いよさいじょう
11
194
11

4 石風呂記念碑
6 諏訪神社
7 諏訪山古墳
11
8 飯積神社の秋祭り
9 おみたて
西福寺
10
11 宮崎家
西条東中学校
文
稲積神社
17
白馬の地蔵
16
飯岡公民館
文
飯岡小学校
18 境界石
鎮玉宮
14
15 延命庵
19 堂の本の地蔵屋敷
20
サケ川
11
西原の大地蔵
28
29 土壇さん
22
半田古墳塚
21
熊野神社
33 塞神
11
32 風神社
秋都庵と
虚子の句碑
23
27
越智信濃守の墓
いよ西条ＩＣ
30 素鷲神社
天皇庵
31 王至森寺
大浜の薬師堂
26
松山自動車道
24
御陵神社
25
大浜城跡

1 お舟森

景行天皇の皇子・武国凝別命（たけくにこりわけのみこと）は、国土開発の大任を帯び、父帝より伊予御村に封ぜられ、成務天皇28年（158年）西条御舟川のほとり「お舟森」に着かれて、眺望の佳（よ）い清浄の地・伊曽乃台地に皇祖・天照大神（あまてらすおおみかみ）の荒魂（あらみたま）を奉祭（ほうさい）したといわれている。

碇神社

2 碇（いかり）神社

地元で「おいかりさん」の愛称で親しまれている碇神社（氏子は永易、市塚、明神木）は、今は玉津団地の陰に隠れるように鎮座しているが、「西條誌」明神木村の項に、明神木にあったことが記されている。発掘調査により楠の大木が出土し、碇明神跡であることが裏付けられた。社は、明神木→玉津丸山ノ本→玉津宮ノ本（現在地）へと移った。

神社には8枚の棟札（むなふだ）があり、特に注目されるのは最も古い永享6年（1434年）のもので、県内では5番目、東予地方では3番目に古い。「まじない」が記されており、この種の呪術的要素のある棟札は全国的にも珍しい。また、中世―近世―近代と各年代に亘って揃っており、神社の沿革史、村名の変遷、幕藩体制の確立、宝永地震の記録など、地域史解明の貴重な史料である。

船屋新開埋立記念碑

3 船屋新開埋立記念碑

大正14年、西條町、大町村、神拝村、玉津村が合併して、新西條町が誕生したが、その初代町長・菅貞仁が、西条の海岸が遠浅で干拓に適していることに着目し、町会議員から選ばれた委員と相談して、大干拓事業を推進することとした。

この時点で、室川、渦井川の改修工事を実施することが決まっており、この事業の実施とあわせ、海岸全域の干拓事業に先立ち、船屋沖干拓を実施することとした。この事業実施にあたって、船屋、下島山地区の関係者を中心とする「船屋干拓耕地整理組合」を組織して、昭和3年11月に工事着工、昭和5年6月に完成した。これを記念して建てられたのが、船屋新開埋立記念碑。

なお、江戸期の「船屋村文書」に「船屋村外絵図」があり、立石と碇神社を基点に干拓が計画されており、これを菅町長の時代に実現したものである。

4 石風呂記念碑

石風呂は船屋の遠浅海岸にあり、海水浴場として長い間親しまれてきた。海の家やシャワーもあり、昭和30年代までは市民の憩いの場所であった。今では、埋め立てによりその姿は見られなくなり、立石に並んで東側にあった岩の一部だけが残されている。

石風呂記念碑

5 酒井家洋館

建築当時は船屋海岸に近く、風光明媚な立地条件にあった。その後、昭和40年前後から始まる埋め立てにより、周辺環境は一変したが、西条では数少ない戦前の洋館として貴重である。

諏訪神社

6 諏訪神社

船屋にある。元は諏訪明神と称していた。祭神（さいじん）・武御名方命（たけみなかたのみこと）は、大国主命（おおくにぬしのみこと）の子で出雲の国譲りの神話に勇壮な物語を伝え、古来武事の守護として祀られる。

7 諏訪山古墳

天井の高さ２ｍ、壁面全てが粘土で目塗りされており、積石はあまり大きくない。横穴式の円墳で、玄室内部はアーチ型をしている。出土品の一部は市の郷土博物館に収蔵されている。

飯積神社

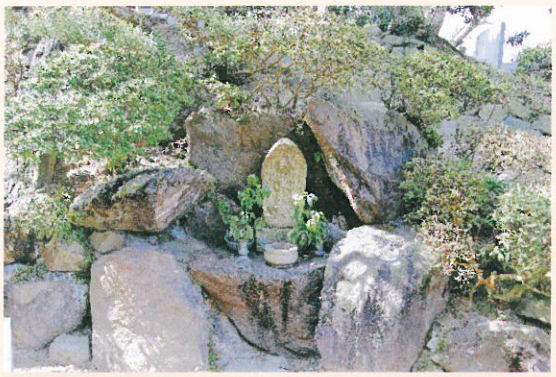
8 飯積神社の秋祭り

主祭神は倉稲魂命（うがのみたまのみこと）で、配神としては国魂愛比売（くにたまえひめ）、十城別王（とうきわけのきみ）、足仲彦天皇（たらしなかひこのすめらみこと）、気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと）である。

下島山・船屋・飯岡・大生院地区の氏子によって、10台の太鼓台が奉納される。10月16日は自由行動、昼2時頃、玉津橋付近で、祭礼巡行中のだんじりと地元の太鼓台が出会う。17日早朝、提灯や照明によってライトアップされた太鼓台は、神社前に集合した後、明け切らぬ道を賑やかに太鼓の音を響かせながら、船屋地区へ向かい、その後は氏子部落を巡る。夕刻再び、神社前に勢揃いする。このときの神輿と太鼓台のかきくらべは見応えがある。金糸・銀糸に飾られた太鼓台が、夕陽を浴びて一斉にかきくらべされる様はまさに豪華絢爛。

9 おみたて

神無月（かんなづき）の10月は全国の神々が出雲に集まり会議を開くとされているが、飯積神社では旧暦9月末日に氏子が神社に集まり、道中の無事を祈り、しばらくのお別れを惜しんで、お見立て（お見送り）をする。1ヵ月後の旧暦10月末には、また氏子が集まって、神さまのお帰りを喜んで、お迎えの行事をする。



西福寺の石仏

10 西福寺

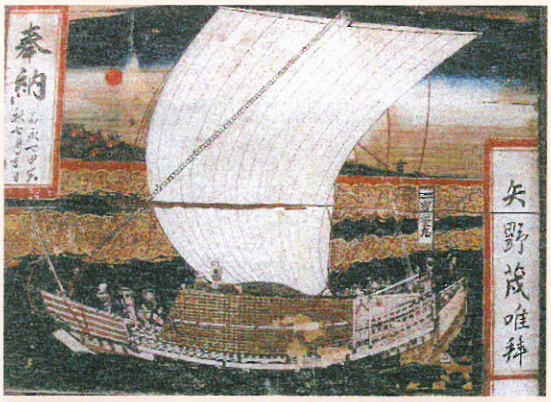
真言宗御室派、医王山東光院。本尊は大日如来。寺に沿う山中には、天保時代に作られたものといわれる四国八十八ヶ所になぞらえて建てられた石仏があったが、大師堂の下段へ移設された。寺の詳しい由緒などは分かっていない。

11 宮崎家

宮崎家は下島山の地主。本瓦葺き、八ッ尾（下屋付きの入母屋）の農家住宅。昭和8年に周桑郡吉井村から移築した主屋は7間半×5間半、式台玄関付き。離れは大正元年の建築。長屋門は改築されている。

12 吉祥庵の船絵馬

寺伝によると、吉祥庵は矢野与五郎茂信が建立したとされている。お堂には与五郎五十回忌にあたる嘉永7年（1854年）に、寶栄丸の航海安全を祈願し、孫の矢野茂唯が絵馬を奉納している。この絵馬には江戸時代後期の弁財船が描かれている。船体部分は版画で背景は手書きである。幟には「寶栄丸」という船名を見ることができる。



吉祥庵の船絵馬

13 朝潮太郎（高砂浦五郎）

大相撲元大関、玉津出身で本名は坪井長吉。初代朝潮太郎に弟子入りし、「朝嵐」と名乗る。その後、師匠の名「朝汐太郎」を襲名し、のち「朝潮」に改め大関まで昇進した。引退後、年寄「高砂」を襲名し、第三代高砂浦五郎として、前田山（保内町出身）など多くの力士を育てた。
高砂浦五郎碑が西條神社旧境内地内にあり、朝潮太郎についての詳しい碑文がある。こどもの国にはブロンズ像がある。

14 鎮玉（しずたま）宮

地元の古老の話によると、昔、戦に敗れて逃れてきた姫がこの地で病に倒れたため、渡辺・真鍋両家がこの死を哀れんで、その亡骸を葬り、姫の名をとって「鎮玉宮」と名付けたと言われている。お祭りは旧の8月27日に。

15 延命庵

その名のとおり、幼児の成長や長生きなどを願う、延命地蔵菩薩をお祀りしている。以前、寺子屋として使っていたこともあると言われており、昭和50年まで庵主がいた。今は地域の世話人が管理している。
合掌した両腕の肘が豊かな胸のふくらみのような形をしており、変わったお姿となっている。

延命庵

16 白馬の地蔵

天正の陣で討ち死にしたといわれる武将・但馬守が祀られている。この同じ敷地の入り口に、安永5年（1776年）7月24日と刻字のある地蔵さんが西向きに祀られている。地元の有力者が但馬守供養のために祀ったとの説もある。
その頃、下島山森戸から西原に通じる道を白い馬に乗った人が通ると、落馬したりけがをしたりしたので、村人が地蔵さんを西向きに建てて供養した。それ以来災難がなくなり、村人はこの地蔵様を「白馬の地蔵」と呼ぶようになったとの言い伝えがある。いつの頃か今の場所に移され、お祀りするようになった

白馬の地蔵

稲積神社の社叢

17 稲積神社

稲積神社がある山は、田んぼの中にぽっかり浮かんだように見える。太古の人はこのような山には神様が降りてくると信じ、神様をお祀りする行事を行ってきた。稲積とは、稲の穂を積み重ねて、来年の種子が採れるようにと神様にお祈りする行事のこと。こうした祈りをささげていた地として、稲積という名がついたものと思われる。いつ頃の創建かは定かではないが、かなり古い時代のものと考えられる。

境界石

18 境界石

江戸時代、他藩との境を示すのに境界石が用いられていたが、そのうち、西条藩福武村と小松藩上島山村との境に建てられていたものが、飯岡公民館前に保存されている。
廃藩後、野田部落の酒造家武田氏から越智潔氏の所有となり、飯岡文化財愛護会が同氏の協力を得て旧公民館に移し、さらに昭和57年現在地に移され、今に至っているものである。
「小松藩会所日記」や「西條誌」を検証した結果、上島山村の西端になる「生竹」と福武村の東端になる「境目」の接する所、現在の場所で言えば、パナソニック四国エレクトロニクス前の交差点から50ｍ程東の、地蔵原に通ずる細い道沿いにあったのではないかと考えられている。

19 堂の本の地蔵屋敷

半田地区・祖父崎池の入口左側にある。小さな石囲の中に地蔵菩薩が祀られ、近くに数基の墓石もある。
この地蔵さんの東には、「小松邑志」に記載のある、“こんぴら松”と呼ばれた幹廻り3ｍほどもある松の古木や、“もみかし桜”（籾をかす頃に花をつけたことからこういう名前がついた）と呼ばれた桜の大木があったとされるが、今はわずかに朽ちた古株がその痕跡をとどめている。
また、「遍路道しるべ」も残っている。

さけ川

20 さけ川

渦井川の上流、大生院川口に「上の井堰」と「下の井堰」が造られている。
うち上の井堰は、左岸の銀杏木井手に四分、上島山・半田井手に六分の、二条に流している。この井手が“さけ川”。上水道が完備するまで、流域住民の貴重な飲料水であった。上の井堰は奈良時代以前の築造と言われ、上島山・半田に導水したのもかなり古い時代と思われるが、確かめることはできない。
藩政時代、上島山、半田、大生院は小松藩の飛び地であった。上島山村と半田村は水不足に悩み、新井手を通すことを出願するが、大生院村の反対を受け、藩庁が「さけ川の井水分散の覚」という仲裁調停を行った。（承応3年＝1654年、大生院村旧庄屋高橋家に覚書が伝わっている）

21 熊野神社

八幡前旧道から南の山へ向かう道の突き当たりに「皇子池築造記念碑」がある。その右側が熊野神社参道入口となり、急勾配の石段を登りつめた半田山の中腹に社がある。すぐ東が皇子池。『愛媛県神社誌』や『西條市誌』の記述によれば、祭神は菊理比売命で、古くは皇子権現と称していたことが知られるが、その起源の詳しいことは分かっていない。

22 半田古墳塚

上半田にあり、地区の人は「石ぐろ」と呼んでいる。同じような大きさのものが二つ並んでいる。昭和の初め頃までは、それぞれの古墳に出入りすることができ、子どもたちの格好の遊び場となっていたといわれる。今は傷みが激しく、どのような形状であったかわからなくなりつつある。
さらに200mほど西にも、“大だきさん”とか“おんざきさん”とか呼ばれた「石ぐろ」があったが、今は壊され整地されている。古墳は権力の象徴であり、この地方には古くから強い勢力を持った豪族が存在した、開けた地域であったことが窺える。

半田古墳群

23 秋都（しゅうと）庵と虚子の句碑、墓所からの眺望

飯岡・半田山の山裾（インターチェンジ西あたり）にある小さな寺。室山義通寺といい、秋都庵の愛称で親しまれている。元禄4年（1691年）秋、小松藩3代藩主一柳直卿公がこの地に遊び室山の紅葉をめで、“秋の都”＝秋都庵と名付けられたのが始まりといわれ、「秋都庵」の扁額も庫裡に掲げられている。本尊の千手観音像と厨子は市指定文化財。
春の桜も美しいが、萩の花がこぼれるように咲く秋は格別情趣深く感じられる。
高浜虚子の外祖父母の墓がある縁で、虚子の句碑があり、多くの俳人も訪れている。“惟んみる　御生涯や　萩の露”。
また、この地は高台にあり、燧灘を遠望できる景勝の地でもある。春の桜、秋の萩も美しく、墓所からの市街地方面の眺め、田の面に映える夕日の輝きなど、すばらしい眺望が楽しめる。

秋都庵の千手観音像

24 御陵神社

早川部落から南東に約300ｍほど離れた山の中腹に、社は西に向って鎮座している。小さい社ではあるが、霊験あらたかな神様として人々に崇敬されてきた。
早川部落には祭神が天智天皇であるという言い伝えが残っている。異説はあるが、なぜ西条の草深い地に天智天皇を祀ったという言い伝えが残っているのか、いつどのような人たちが創建したのか詳しいことは分かっていない。
境内の南斜面から和鏡（直径10.6㎝、厚さ8㎜）が出土した。後の調査で、平安末期の作とわかり、現在は飯積神社に保管されている。

御陵神社

大浜城跡

25 大浜城跡

大浜集落の南東に位置する標高400ｍほどの山城。西は谷を隔てて番所があったとされる番屋部落を見下ろし、北と南は急峻な絶壁で、容易に人の登坂を許さない天然の要害となっている。本丸は東西30m、南北20mの平地で、城主神社がある。東南側は石塁をもって囲み、すぐ下には東西両側に空濠がある。
城主については、文献により諸説があり一定しない。天正の陣で落城したと伝えられており、旧7月6日には、大浜地区あげて、城主祭を行っている。これを通称「おしろさん」という。市指定の史跡である。

大浜の薬師堂

26 大浜の薬師堂

道標を頼りに谷川に沿って約１km登った所にある。本尊は薬師如来。古くから、霊験あらたかな「大浜のお薬師さん」として、多くの信仰を集めており、今も参詣者が絶えない。

27 越智信濃守の墓

地方豪族・越智信濃守の墓と先祖の供養塔。ともに高さが2mほどもある立派なもの。

西原の大地蔵

28 西原の大地蔵

旧国道（こんぴら街道）飯岡郵便局の向かいに小さなお堂がある。この中に石造りのふっくらした顔の、大きな地蔵様が鎮座している。古い昔から、この場所で、街道を往来する人や地域の人の安寧を守ってきた。今も花が途切れることなく供えられ、人々に愛されていることが分かる。

29 土壇（どだん）さん

西原部落の西端、室川に近い畑の隅に「土壇さん」がある。手ごろな石を方形に積んで石ぐろを作り、その上に小祠を二基祀り、前に大きな自然石を据えてある。藩政時代の処刑場であったと言い伝えられているが、小松藩時代、あるいはそれ以前にも、そのような記録は見当たらない。したがって、その起源は不明である。
「土壇」は「土断」とも書く。土断法は律令時代、課役を忌避（きひ）して浮浪する者を逃亡先で戸籍や計帳に登録し、課役するための法である。律令制の浸透度には疑問があるが、もし関係があるとすれば、天平文化を支えた人々の苦しみや悲しみ、厳しさを伝える遺跡であるのかも知れない。

30 素鵞（そが）神社、天皇庵とお産能（さんのう）さん

東野口の南山麓に、素鵞神社（旧天皇宮）とその参道の左側に天皇庵がある。素鵞神社の祭神は牛頭天王（ごずてんのう）、天皇庵の本尊は薬師如来。

天皇庵を少し東に進むと、お産能さんの祠がある。「明和4年（1767年）8月吉日」と刻まれた手水鉢（ちょうずばち）、すぐ横には石の線香立が立っており、神仏習合の名残りをとどめている。祠の中に、「山王廿一社権現宮」と書いた木札が納められている。山王権現信仰からくる「山王」の発音が「産能」に通ずることから、いつの頃からか「お産の神様」として信仰されるようになったといわれる。

また飯岡の昔話によると、「享保の頃、この山里に一人の貴族の女性が住んでいたが、お産のもつれから母子ともに亡くなった。その霊を供養すれば安産祈願が叶えられると伝えられ、お産の神様として信仰されるようになった。」ともいう。

王至森寺のキンモクセイ

31 王至森（おしもり）寺とキンモクセイ

王至森寺は真言宗御室派に属し、本尊は大日如来。寺には小松藩3代藩主一柳直卿の扁額が二つ残されている。

指定の当時は、日本一の大きさと言われた国指定の天然記念物「キンモクセイ」（昭和2年指定）で有名。一時枯れかかったが、樹木医の治療を受けたり、多くの市民のお世話で勢いを取り戻している。樹勢の盛んな頃には、一里四方にその芳香が漂ったと言われている。その香りは西条祭りの到来を知らせる。平成13年10月には環境省の「かおりの風景百選」に選定されている。

かおり風景百選碑

32 風（ふう）神社

大きな楠の木の下に、石の祠と地蔵堂がある。神社というより広場という感じ。風押さえの神様である。

昔この地を開拓したのは伊勢国神戸（かんべ）（今の三重県鈴鹿市）から移り住んだ人たちで、その頃“のがま”（かまいたち）の被害が多かったので、先住地の荒神さまを万治年間（1658年～1661年）に勧請（かんじょう）したのが始まりではないかといわれている。

同じ社地に、社日宮、金比羅宮、祇園宮が祀られ、少し離れて地蔵堂も祀られている。一年を通して、地蔵参りの人が絶えることがなく、地区のコミュニティ中心地ともなっている。

33 塞　神

旧国道の王至森寺入り口前を少し東に進むと、道路わきに塞神が祀られている。いつ頃、なぜこの地に祀られるようになったのか、詳しいことはわかっていない。

現在の石祠は大正11年に造られたもので、「歳神」と刻まれている。無刻の自然石では後に隠滅するおそれがあるので、造りかえたものと思われる。古い自然石の塞神も同じ場所に残されている。

塞神は、「才の神（さいのかみ）」、「幸神（さいのかみ）」、「障神（さえのかみ）」ともいわれる。戻川にある塞神は花崗岩に「塞の大神」と刻まれている。

風神社

諏訪山古墳

堂の本の地蔵屋敷

秋都庵虚子の句碑